
成仏局第二課、重田みつ

平岡れお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

成仏局第二課、重田みつ

【Nコード】

N5770L

【作者名】

平岡れお

【あらすじ】

大宮真吾、23歳。

大学四回生の梅雨明け時に、自分は天使と言い張る老婆と出会う。

彼女との出会いをキツカケに、成仏できない様々な人と出会い

「生」と「死」について深く追求していく事に……。

「生」とは何か？

「死」とは何か？

笑いあり、涙ありの心温まるファンタジー小説。

第一話：梅雨明けとともに

愛想のないインターホンの音が部屋に鳴り響く。

目覚まし時計に起こされるより腹立たしいものではあったが、結局は目を開ける事にした。

部屋のフローリングに脛のものか腕のものか見分けのつかない体毛が、細々と抜け落ちていく。

ウチの猫が季節の変わり目だから、たくさん毛が抜け落ちるのよと、ため息を漏らしながら主婦の群れが道端会議を開催していたの思いつく。

周りの主婦は、それはとても深刻そうにうんうんと頷いていたのだが、議長の風格がある大柄の主婦だけは解決策を導き出そうと顎を手で擦っていた。

白い買い物袋から飛び出している長ネギは、場に静粛を促す木槌のような役割を果たすものかなと考えていたが、叩いて音が鳴るとは到底思えないし、何より途中からどうでも良くなってきて考えるのを止めた。昨日の大学の授業の帰りであったと思う。

どうでも良すぎてあんまり覚えていない。

もう一度、愛想のないインターホンの音が鳴る。

「大宮さん、起きていますかい。大宮さん」

「今日も暑いですなあ。昔の六月というのはこうも暑くはなかった。地球温暖化というものですかねえ。とか言っても去年の冬は寒かったよねえ。よくわからんもんですなあ。で、大宮さん、一晩考えた答えは如何な程に？」

「あのお、どちら様でしょうか？」

「もう忘れたのですかい？いやだなあ、天使ですよ、昨日会ったじゃないですか。ああ、人間は生きていく為に都合の悪い事を忘れるってのは本当だったのですねえ。」

玄関に立っていたのは、まったく身に覚えのない老婆だった。

杖がなければ、顎から落ちるのでないかと思っぐらい腰はひん曲がり、黒い花柄のワンピースを身につけ、赤いサンダルを履いている。ワンピースからひよろりと出る手や足には血管が浮き上がり、色白な分、余計に目立っていた。

肌に弛みはないものの、しわやシミはしつかり存在感を出している。しかし、艶やかさを補った愛くるしさがあつた。

目鼻立ちは決して整っているとは言い難いものの、白髪ゆるいパーマを当て、満面の笑みを浮かべながら、紫陽花がプリントされた団扇をパタパタとさせている姿を見て、純粹無垢という言葉は、この老婆に為にあると思つた程だった。

昔は「綺麗」より「可愛い」を武器にして、男性を落としてきたのだなと思つた。

ただ、この老婆に全く身に覚えがなく、連日続く暑い日々をやられたに違いないと断定した。

至極一般的な老婆が、私は天使ですときて、誰がはいそうですかとくるのだろうか。

全く、面倒な事に巻き込まれたものだな。

「で、答えは如何な程に？大宮さん」

「ちよつと待つてください。答えて何ですか？いや、それよりどちら様何ですか？」

「何度も言っている通り、天使ですって。あなた、もしかしてモテないでしょう？しつこいですもの。」

年寄りを敬め、という教えに背いた事は今までにないつもりだ。些細な事ではあるが、電車内でも席を譲るし、毎年の墓参りにもちやんと付き添っている。

ただ、現状を把握できないのと、今までの恋愛事情に凶星をつかれ

たのと合い重なって、我慢できず教えに背いてしまった。

「あんた、馬鹿なんじゃないですか？」

まあ、よくもこんなに口を膨らませるものだな、と感心すると同時に怒りの表現の仕方がやはり古いなとも思った。

「本当にすいません。何が何だか分からなくて。謝ります。謝りますから、僕にも理解できるようにお話して頂けませんか？お願いします」

依然、怒っている様子ではあったが、老婆の口風船は次第にしぼんでいった。

「仏の顔は三度までって言うしねえ。それよか、お腹が空いた。どこぞのカフェでランチでもしながら話をしますかねえ。立ち話も何だし」

天使じゃなかったのかよ、そこは歳相応に喫茶店と言えよ、同じく昼食と言えよ、喉まで出掛ついていたセリフの群れだが、せっかく老婆の怒りは何処かに飛んでいったみたいなので、ここは我慢して飲み込む事にした。

大学周辺に詳しくない老婆は、結局は僕に食事をする飲食店を決めさせた。

大学に入学して四年目になる。

つまりは四回生なのだが、一回生から大学近辺のアパートに一人暮らしをしてきた僕は、多少なりとも大学近辺の飲食店には詳しい。やはり飲食店の経営者は恵まれた立地条件に目をつけるのか、数多くの飲食店が並ぶ。

しかし、僕が入学して今に至るまで同じ名の看板が立っている飲食店は数件しかなかった。

「速い」「安い」・「多い」を売りにする大学食堂にあえなく負け

るのだ。

それこそ、インドやエスニック料理等の奇をてらったメニュー、くつろぎやゆったりを意識した緑の多い店内空間といった、それぞれ売りを全面的に押し出して経営展開する飲食店が存在したのだが、大学食堂以外で生き残ったのは床が油で滑る中華料理のチエーン店や、頭を禿げ散らかした親父が、たばこを銜えながら調理する大盛り焼肉定食が売りの飲食店であった。

同じ立地で違う飲食店ができるの繰り返しで、客の回転より飲食店の回転の方が速いのではないかと思う程だった。

天使と言い張る老婆は、カフェを希望していたので、おそらく一年後には存在していないだろうお洒落なカフェに入る事にした。

アパートから徒歩十分程の場所であったが、ゆったり歩く老婆を見て、着く頃には閉店のプレートがドアに掛けられているのでは心配した。

すっかり梅雨は明けたみたいだな。

長い桜の並木道にさしかかる。

歩道に散りばめられた木漏れ日の上を老婆と歩く。

団扇のプリントされた紫陽花が物寂しそうに老婆に風を送っている。

「えっと、何にしようかねえ。イタリア仕立てのもっちりトマトピッツアにしようかねえ、それとも長靴コックの海岸アサリパスタにしようかねえ。しかし肩書きがでしゃばる商品名ばかりね。」

メニューを選ぶ老婆の姿は、大学の女友達とランチをしていると錯覚する程、はつらつとしていた。

この場面では一緒に悩む方がいいのかと一瞬考えたが、相手が天使と言い張る老婆であったので止める事にした。

「思い出した、そうですね、事情を説明して下さいよ！天使さん」

「大宮さん、私にはね、みつという列記とした名前があるのですよ。重田みつと申します。自分で考えたんですがねえ。」

「みつって……容姿相応にも程がある名前じゃないですか！もつと天使っぽい名前じゃないんですか？ミケランジェロとかラファイルとか」

「その何処が天使っぽいのですかねえ」

「なんとなくですよ。なんとなく。そんな事より、何か証拠とかないんですか！あなたが天使であるっていう証拠を。信じられるわけがありません」

老婆は近くにいたウェイターに声をかけ、天使の卵のふんわりオムライスを注文した。

いかにも満足気にこちらを見て微笑んだ。

「いやいや、ふざけるのもいい加減にして下さい。何かあるでしょう、ほら、僕の素性をよく知り尽くしているとか。映画とかによくあるやつです」

「んー名前と年齢ぐらいしか分からないわねえ。後、昨日交通事故にあつてこの世に強い未練を残して亡くなった事ぐらいかねえ」

「ほら、全然僕の事知らないじゃないですか。天の使いが聞いて呆れますよ。だいたい亡くなつたって……。えっ……最後らへん何か言いました？」

「昨日、大学の帰り道の途中、車に跳ねられて亡くなりました、と言いました。」

「はっ？」

少しの沈黙の間、万を事したかのように蝉が遠慮気味にじりじりと鳴いた。

あまりにも時期尚早な事に気づいたのか、すぐに鳴き止む事にしたみたいだった。

おいおい、蝉は七日しか生きられないのだろう。

この時、一瞬一瞬は君にとって大事な時間じゃないのか。鳴ける時に鳴く方がいいに決まってる。

第二話；合戦

何の根拠もないはずなのに、あなたは死んだと言われれば少しは動揺するものだ。

いや、見ず知らずの老婆が、しかも天使と言い張る人から言われたからかも知れない。

テーブルにあつたお冷を少し飲む。

動揺を隠すつもりで冷静ぶつてはいたが、十中八九この老婆には見抜かれていたに違いない。

でも大丈夫、こうして喉を通るお冷は冷たいと感じるし、第一、普通に生活している。

少し考えれば、落ち着きを取り戻す事に成功した。

「残念だけど、これは事実なのよねえ」

「いえいえ、現に僕はこうして普通にカフェに居ますし」

「皆そう言うのよねえ。ちなみに、あなたの素性を詳しく知らないのは、成仏局から渡されたあなたの資料をまだ目を通していないだけ」

大宮真吾、23歳。

大阪府富田林市にて大宮勉、めぐみの次男として生を授かる。

姉には美香。

大きな蒙古班がなかなか消えず、両親を悩ませたが健康上問題はなく、順調に成長する。

一歳を迎えた時、父、大宮勉の仕事上の都合より埼玉県春日部市に移住する。その際に……

科学者の研究資料のような分厚い束の紙に、僕の今までがずらりと記述されている。

家族にしか分からない事や本当にどうでも言い事までくまなく記されていた。

なるほど、映画みたいな展開だ。

正直な所、この老婆が天使であるか、そうでないかを見極める要素なんて、僕の素性を知っていたり、背中から羽が生えていたりはたまた、頭上に電灯のような丸いわっかが浮いているとかそんな事くらいしかなかった。

しかし、彼女が天使である事を認めるのは、それは僕の死を認めるのと同じだ。

もつと天使について研究すれば良かったとお門違いな後悔をする。

この老婆が天使でないという決定づける情報が僕にはあまりにも少ない。

その中で僕の素性を知っているという要素は、この老婆が天使であるという余りにも有力な要素だ。

でも、でも…羽が生えていない、わっかもない。

何より、天使は老婆なんかじゃない。

そういつた要素が、僕をまだ支えていた。

「有名な探偵か何かに依頼したものでしょう？そんなの、調査すれば分かる事です。」

「あら、強情っぱりねえ。あなたモテないでしょ。頑固ですもの。」
認めてたまるか。世界を敵にしても認めてたまるか。

「ほらこれ、あなたが身に着けていたペンダント。ちょっと血まみれで分かりづらいけど」

間違いない僕のだ、しかも血まみれ。

これは、裁判の行方を決定付けるような証拠が出てきた。

彼女が天使であると書いた天秤皿が大きく下に傾く。

濁流に飲み込まれていく僕がいる。

辺りに藁でもいいから根付いていないか必死に探した。

「は……羽が生えていない、そうです、羽が生えていないじゃないですか！天使は羽が生えているものです！そうだ、そうに違いない！」

彼女はため息をつきながら、そつと僕に背中を向け、ワンピースを少しずらす。

ちくしょう、ちくしょう……天使の羽が折りたたみ式なんて聞いてないぞ。

もう、頭上に浮くわっかとか老婆とかどうでも良かった。

錦旗を掲げる薩長軍の前に立ち尽くす幕府側の田舎侍かの如く、戦意を失っていた。

「やっぱり羽を見せるのが一番効くのよねえ。でも恥ずかしいのよねえ。一応女だし。ほんとは天使に男も女もないけどねえ。そもそも、人間が勝手に作った天使のイメージが厄介なのよねえ。まあ、裏を返せばそれに沿った姿形をすればすぐに認めるってわけか。いっちょ、上司に提案してみようかねえ。このやりとりはいちいち面倒臭いの。」

独り言のように喋る天使のみつさんを忘れて、僕はずっと窓から見える風景を眺めていた。

エプロン姿のまま歩く母親が幼稚園の制服を着た子供と手をつないで、さつき自分とみつさんが歩いていた木漏れ日歩道を歩いている。僕は将来、家庭を持つ事ができないのかと思うと、うっすらと涙が浮かんできた。

そうか、僕は死んだのか。

それからみつさんは、大まかに事情を説明してくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5770/>

成仏局第二課、重田みつ

2010年10月28日05時13分発行